

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

A. コースワークの充実・強化

②分野横断的な科目群、副専攻科目群等の充実

《人社系》

●筑波大学人文社会科学研究科文芸・言語専攻

「新領域開拓のための人社系異分野融合型教育」の事例

(具体的に何を実施したのか)

人文社会科学研究科インターファカルティ教育研究イニシアティブに専攻横断型の科目を設置し、大学院生が自己の所属する専攻の科目のほかに、あらたな研究領域開拓のための科目を履修できるようにした。特に社会科学系の学生には人文系の「文明対話学」の履修を推奨し、人文系の学生には社会科学系の「社会科学方法論序説」の履修を推奨した。さらに「人文社会科学のためのキャリアデザイン論」により大学院生のキャリア支援を行い、「人文社会科学のための情報コミュニケーション論」では人社系研究の新たなスキルを身につける支援を行った。「異分野融合リサーチワークショップ」では学生の独創的な研究を専攻横断的に指導する場を作った。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

学生の専門の多様性、年次による知識習得レベルの不均質性をクリアするために、事前の指導、課外での助言などきめの細かい指導が必要であったが、そのことが専門を超えて学生を指導をする機会となり、学際的な雰囲気을日常的に醸し出す要因となった。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

「異分野融合リサーチワークショップ」では、専攻を超えて学生が知り合い、お互いに切磋琢磨しながら議論を深める場を作ることができた。またプレゼンテーションスキルの訓練、自主的セミナーの開催など学生アンケートの結果では満足度が高く、インターファカルティ教育システム導入の成功例と言ってよい。さらに学生主体のカリキュラムの中に「人文社会科学のための情報コミュニケーション論」を導入することで人文系の大学生の研究方法が確実に向上した。本研究科が組織をあげて試みている「人文社会科学のためのキャリアデザイン論」は、人文系のキャリア支援の中でも初めての試みであるが、学生からのニーズはかなり高いものであり、インターファカルティ教育実践の一つの成果と考えている。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

E. 学習・研究環境の改善

②国内外の学会発表、実習等に対する経済的支援の充実

《人社系》

●筑波大学人文社会科学研究科文芸・言語専攻

「新領域開拓のための人社系異分野融合型教育」の事例

(具体的に何を実施したのか)

筑波大学人文社会科学研究科インターファカルティ教育研究イニシアティブのプログラム生を中心に、国内・国外学会での研究成果発表、共同博士課程セミナー（フランス・ドイツ・スロベニア）、インターンシップ（アメリカ、中国、キルギス等）、現地調査（デンマーク、スイス、アメリカ、中国、台湾等）の経済的支援を可能な限り行った。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

実施にあたって、特に学外における研究者としての危機管理を徹底するために、事前の危機管理セミナーを開講し、指導にあたった。またすべての活動を年間を通じた教育という位置づけを行い、プログラム生は各自のニーズに合わせて「現地調査演習」「海外語学演習」「プログラム演習」のいずれかを履修し、事前指導、事後評価を受けるようにした。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

学生の国際的な場におけるコミュニケーション能力、発表能力の強化に役立った。また学生を派遣することにより受け入れ先機関と共同研究プロジェクトなどの連携が促進され、韓国・中国・ウズベキスタン・カザフスタン・スロベニア・ドイツ・フランスの大学間協定の拡充も可能となった。